

高僧伝の注釈的研究 (Ⅱ)

平 井 俊 榮

凡 例

1. 本研究は『駒澤大学仏教学部研究紀要』第49号(1991.3)所載の「高僧伝の注釈的研究」に続いて、梁、慧皎撰『高僧伝』巻1「竺法蘭伝」及び「曇柯迦羅伝」の注釈的研究をなしたものである。
2. 最初に『高僧伝』原文、次にアーサー・リンク教授の英訳、そして筆者の和訳を提示した上で、必要と思われる語句に注記を施した。なお、筆者の提示した和訳は、今回、筆者があらたに原文から訳出したもので、リンク教授の英訳からの和訳ではない。
3. 本研究で用いた原文は、大正蔵経50巻「史伝部」所収の『高僧伝』を底本とし、大正蔵経脚注に記される校勘記を適宜参照した。
4. 今回の原文の分節は便宜的に筆者が施したものである。
5. 注記として採録した語句は、便宜的に原文から採録し、注記番号は原文に付した。
6. 注記において引用した各種文献の中、特に必要と思われるものについては、引用原文を示した後、[] 中において筆者の和訳を提示して読者の理解に資した。
7. 本研究の目的及び経緯については、前掲の「高僧伝の注釈的研究」を参照されたい。

【竺法蘭】¹⁾

竺法蘭亦中天竺人。自言誦經論数万章²⁾。為天竺學者之師。時蔡愔既至彼國。蘭與摩騰共契遊化。遂相隨而來。會彼學徒留礙。蘭乃間行而至³⁾。

Dharmaratna of the White Horse Temple
of Luoh-yang of the Hann

Dharmaratna, Jwu Faa-lan, was also an Indian. Of himself, he said that he could chant by heart several myriad chapters of *sūtras* and *śāstras*. He was a teacher of the pundits of India. When Tsay In had arrived in that kingdom, Dharmaratna and Mātaṅga had together formed a compact to carry on missionary endeavors. Consequently, they arrived one following the other. However, at that time, his disciples delayed and hindered him, and so Dharmaratna arrived by travelling in stages.

[訳]

この人もまた中インドの人である。自ら経論数万章を暗誦し、インドの学者の師であったと言う。おりしも蔡愔がかの地を訪れた。(以前から)法蘭は、摩騰とともに伝道の旅に出ようと約束していた。そこで、ともに蔡愔にしたがって(中国へ)行くことにした。しかし、彼の学徒が留めてはなそうとしないので、法蘭は結局人目をしのいでやってきた。

既達雒陽。与騰同止。少時便善漢言。愔於西域。獲經即為翻譯⁴⁾。十地断結仏本生法海蔵仏本行四十二章等五部。移都寇乱四部失本不伝。江左⁵⁾唯四十二章經。今見在⁶⁾。可二千余言。漢地見存諸經。唯此為始也⁷⁾。

When he reached Luoh-yang, Mātaṅga and he stayed together. In a short time, he became proficient in the Chinese language.

(Tsay) In had procured some *sūtras* from Western Regions. He immediately set to work to translate these. These are known as the *Shyr-dih duann-jye*, *For been-sheng*, *Faa-hae tzang*, *For been-shyng*, and the *Sūtra in Forty-two Sections*, in all, five works. In the troubles of the bandits and of the changing of the capital, the texts of four of these works were lost and never came to be transmitted to the left of the Yangtze. Only the *Sūtra in Forty-two Sections* is at present extant. It

approximates a little more than two thousand words. Of all the scriptures extant in the land of Hann, only this is the first.

[訳]

雒陽に至ってからは摩騰と起居を共にしたが、しばらくして彼は中国語が巧みになった。蔡愔は西域で經典を入手していたので、ために『十地断結經』『仏本生經』『法海蔵經』『仏本行經』『四十二章經』といった五部の經典を翻譯した。都が移ったり寇賊による乱があったりして、四部の經典は散逸して伝わらず、江南の地にただ『四十二章經』のみ、今もなお現存している。この經典は二千語余り（の小さな作品）だが、中国に現在残る經典の中では最も古いものである。

愔又於西域。得画釈迦倚像⁸⁾。是優田王⁹⁾梅檀像師第四作也¹⁰⁾。既至雒陽。明帝即令画工図写。置清涼台¹¹⁾中及顯節陵¹²⁾上。旧像今不復存焉。

(Tsay) In also obtained from the Western Regions a painted recumbent image of Śākyamuni. This was the fourth work of King Udayana's (Iou-tyan-wang) teacher of sandalwood sculpture. When it had arrived in Luoh-yang Emperor Ming immediately commanded painter artisans to make copies and place these on the Estrade of Clear Coolness, (Ching-liang tair), and on the Tumulus of Manifest Integrity (Shean-jye ling). However, at present the image is no longer preserved.

[訳]

蔡愔は、また西域で釈迦倚像の画を手にいれた。これは優田王のために梅檀像を作った工匠の第四番目の作品である。雒陽に至ると、明帝はすぐに画工に命じて、模写させ、清涼台中と顯節陵上に置いた。（もとになった）旧像は、今は存在しない。

又昔漢武穿昆明池¹³⁾。底得黒灰。以問東方朔¹⁴⁾。朔云不委。可問西域人。後法蘭既至。衆人追以問之。蘭云。世界終尽劫火洞焼¹⁵⁾。此灰是也。朔言有徴。信者甚衆¹⁶⁾。蘭後卒於雒陽。春秋六十余矣。

Again, anciently, when Emperor Wu of the Han (reigned 140-87 B. C.) had excavated the Kuen-ming Lake, black cinders were obtained on the bottom (of the lake). (The emperor then) questioned Dong-fang Shuoh. Shuoh replied that he did not know (what the ashes were) but that the barbarians of the Western Regions could be asked.

Later, when Dharmaratna arrived, many people followed up (this affair) and questioned him. Dharmaratna replied, "When a world ends, the fire of the aeon (of destruction) (*samvarta-kalpa*) consumes everything; these cinders are this!" As Shuoh's words had verification those who believed were very many.

Dharmaratna later died in Luoh-yang. He had seen more than sixty springs and autumns.

[訳]

その昔、漢の武帝が昆明池を掘らせたところ、底から出てきたのは黒い灰であった。そこで東方朔に尋ねると、

「わかりません。西域の人に聞いたら良いでしょう」

との答であった。後に法蘭が(中国)にやってくると、人々は彼に追いついてこのことを質問した。蘭が言うには、

「世界の終末には大火災が起こって、何もかも焼き尽くしてしまう。この灰は、その時のものである」

とのことで、東方朔の言葉が立証されたわけであった。

竺法蘭は後に洛陽で亡くなった。六十余歳であった。

【竺法蘭伝注】

1) 竺法蘭……『四十二章経』の訳出を作者不詳の「経序」に竺摩騰としているが、慧皎はこれを「有る記に云わく」と疑問視し、撰摩騰がせつかく中国にやって来たものの、仏教に帰依するものがまだなく、経典を訳出するまでにはいたらなかったとし、むしろ訳経の事は竺法蘭に始まると見なしたようである。つまり慧皎は、最初の渡来僧を撰摩騰とし、最初の訳経僧は竺法蘭と位置づけたわけである。しかし、実のところ、その存在は撰摩騰と同じく疑わしい。

2) 誦経論教万章……初期のインド仏教史には、専ら暗誦によって経法を受持していた時

- 代があり、その点、たくさんの経法を受持するための方法も探求されたく、各種經典には「一切の所聞を受持し、忘れざるが為に」陀羅尼を得ることが説かれている。陀羅尼については、平川彰『初期大乘仏教の研究』(1968, 227-242頁)を参照されたい。
- 3) 間行而至……間行は、人目を忍んで行動すること。竺法蘭は、学徒の妨害にあつて、蔡愔や攝摩騰と行動を共にすることができず、彼らよりやや遅れて洛陽に達したといふのであろう。なお本書巻8 釈智秀伝に「間行避走」〔隠れて行き、人目を避けて走つた〕の用例がみられる。
 - 4) 翻訳……兩晋南北朝の経録に、竺法蘭の訳経のことは全く現れない。隋の費長房『歷代三宝紀』になつて、初めて著録されるが、信憑性は甚だ薄い。
 - 5) 江左……揚子江の下流域、江蘇・浙江兩省の地で、左右は揚子江の北からみて言われる。ここでは南朝の地。
 - 6) 唯四十二章経今見在……『出三蔵記集』巻2に、「四十二章経一卷。旧録に孝明皇帝四十二章という。安法師の撰ぶ所の録に此の経を闕く」(T55.5c)とあつて、道安はこの経を知らなかつたといふことで、慧皎は北地で早く散逸して、南朝にのみ伝わつたと解したのである。
 - 7) 漢地見存諸経唯此為始也……『出三蔵記集』巻2の、「古経の現在せる、四十二章より先なるは莫し」(T55.5b)といふ僧祐の言を承けたものであろう。
 - 8) 得尽釈迦倚像……本書巻13の興福篇の論に「蔡愔と秦景、西域より還り至るに及び、初めて画氈の釈迦を伝ふ」とあつて、毛氈に描かれた画であつたようである。
 - 9) 優田王……Kauśāmbī 国の王 Udayana のこと。『増一阿含経』巻28及び『大方便報恩経』巻3に、ある時仏が三十三天に上つて母のために説法し、久しく帰つてこないで、優田王が牛頭栴檀をもつて高さ五尺の仏の形像を作つたことが説かれている。『觀仏三昧海経』巻6では、「金を鑄て像を作る」とある。造像の創始伝説である。この伝説は、南伝の經典には伝えられていない。
 - 10) 栴檀像師第四作……特に「第四の作」とことわつている点、何か意味ありげな記述であるが、不詳。ちなみに本書巻13の慧達伝に、偶然金銅仏が掘り出され、この仏像に梵書が附されていいて、「是れ育王第四女の造る所なり」とあつたといふ。
 - 11) 清涼台……『三輔黄圖』に、「清涼殿、夏に之に居れば、則ち清涼なり」とあり、漢代の夏宮である。
 - 12) 顯節陵……明帝の寿陵(生前に作られる陵墓)で、『後漢書』巻3に、永平14年(71)夏に作られたとある。
 - 13) 漢武穿昆明池……昆明池は、前漢の武帝(B. C. 140-87)が、水戦演習のため長安郊外の御苑上林苑の中に開鑿した池。池の底に黒灰が見つかつて云々といふこの段の挿話は、干宝(?-317)の『搜神記』を初めとして『三輔故事』、曹毘『志怪』、『幽明録』、『雜鬼神志怪』、宗炳「明仏論」(『弘明集』所収)など、六朝期の文献にしばしば取り挙

げられた。しかし、黒灰が何であるかを説示した人について、これらの文献では、単に「西域道人」と言い、竺法蘭の名はもとより特定の僧名が現れない。但しこの「西域道人」は、後漢明帝の時に洛陽にやってきたというので、慧皎はこれを竺法蘭に擬したもののらしい。

- 14) 東方朔……B. C. 154-93, 前漢の武帝の時代に活躍した人で、諧謔・方術・奇行・博学をもって知られる。
- 15) 世界終尽劫火洞焼……劫は, kalpa の音訳で, 大きな時間の意味。その長さは、譬喩的にしか表し得ないほどの長大さで、たとえば一辺一由旬(約7.4km)の立方体をした城の中に、芥子粒を満たし、百年に一粒ずつ取り出して行って、全部取り終わっても、なお足りないと言われる。ところで仏教の世界観では、世界は、壞劫(消滅期)、空劫(空白期)、成劫(生成期)、住劫(所住期)の四段階を一周期として、消滅を繰り返すと考えられている。そして、それぞれの段階が二十劫で、都合八十劫で一周し、これを一大劫といい、一大劫に一度、大火災があつて世界を焼き尽くすのである。
- 16) 信者甚衆……この語は、『搜神記』などにはないので、慧皎が附したものらしく、その点、少なくとも梁代には、この挿話が竺法蘭の逸事としてかなり普及していたわけがある。

【曇柯迦羅】¹⁾

曇柯迦羅此云法時。本中天竺人。家世大富。常修梵福²⁾。迦羅幼而才悟³⁾。質像過人。讀書一覽。皆文義通暢。善學四圍陀論⁴⁾。風雲⁵⁾星宿⁶⁾凶讖⁷⁾運變⁸⁾。莫不該綜⁹⁾。自言。天下文理¹⁰⁾。畢己心腹。

Biography of Dharmakāla

T'an-k'o-chia-lo, which means "Law-time", Fa-shih (Dharmakāla), was a man of Central India (*madhyadeśa*). His family for generations had been very wealthy. They always practiced Brahmanism. Even as a child his natural talents and apprehension, and his disposition and appearance surpassed others. When he read books, with but one glance he could understand without difficulty the entire sense of the texts. He excelled in the study of the four *Vedas* and *śāstras*. As for [a knowledge of the future, etc., ascertained by understanding] the revolution and changes of clouds, constellations, divinatory charts and apocrypha—there were none of these that he had not thoroughly encompassed. He himself said

that, as regards the world's literature and the concepts expressed therein, he had wholly mastered these in his own mind.

[訳]

曇柯迦羅は、中国では法時という。もとは中インドの人である。家は代々裕福で、常に梵福を修した。迦羅は幼い時から才たけて聡く、容貌もひとなみ優れていた。書物は一度読むだけで、その意味をすべて理解し、善く四ヴェーダを学んで、風と雲の動き、星宿（星座）、凶讖、運変にも通曉していた。そして自ら次のように言っていた。

「世界の現象とその意味は、ことごとく私の心腹にある」

至年二十五。入一僧坊。看遇見法勝毘曇¹¹⁾。聊取覽之。茫然不解。殷懃重省。更增昏漠。乃歎曰。吾積学多年。浪志¹²⁾墳典¹³⁾。游刃¹⁴⁾経籍。義不再思。文無重覽。今覩仏書。頓出情外¹⁵⁾。必当理致鉤深¹⁶⁾。別有精要¹⁷⁾。於是齋卷入房。請一比丘。略為解釈。遂深悟因果。妙達三世。始知仏教宏曠。俗書所不能及。乃棄捨世榮。出家精苦。誦大小乘経及諸部毘尼¹⁸⁾。常貴遊化。不樂專守¹⁹⁾。

At the age of twenty-five he went into a Buddhist monastery and happening to see the *Fa-sheng p'i-t'an*, he picked it up with the idea of reading it. So profound was it that he could not understand it. He conned it with diligence and concentration, and doubled his attentiveness, but this all the more added to his bewilderment and confusion. He then sighed, and said, "I have accumulated learning over many years. I have expended great effort [in studying] the ancients canons, and have [consequently] become an expert in the classical works. As for their meaning, I don't have to think twice about it; as to their wording, I don't need to glance more than once at it. Now examining the Buddhist books, I find that they are beyond my experience. It must be that one will have to follow the tenets of these deep principles into the realm of the most profound; apart from this, there are here subtle and important [specialized terms and concepts]. Thereupon, taking the scroll, he went into the building, and asked a *bhikṣu* in brief to explain

it for him. He thence profoundly apprehended causation and its fruits, and marvelously comprehended [how these extend through] the three times [of past, present, and future]. For the first time, he knew the grandeur and boundlessness of the Buddhist teachings, and that, in this regard, secular books could not come up to them. He then renounced the world, and rejected its glories, and left his home [to become a monk] (*pravrajita*). He exerted himself in the practice of austerities, and recited the *Mahāyāna* and *Hīnayāna* scriptures together with their several works of *vinaya*. He always esteemed traveling and converting and was not pleased to have to take up permanent residence in a monastery.

[訳]

二十五歳になって、ある僧房に行つて、偶然に法勝の毘曇を見た。何気なく取つてこれに目を通したが、全く理解することができなかつた。丁寧に再び読みなおし考えてみたが、困惑と混乱を増すばかりであつた。やがて彼は嘆息して言つた。「私は多年にわたつて学問を積み、古典を探求し、さまざまな書物に目を通したが、再びその意味について考えたりすることはなかつたし、改めてその文章を読みなおしたりすることもなかつた。しかし今、仏教の書物をみると、それは私のまるで考え及ぶところではなかつた。必ずやその内容は深淵であり、(今までに学んだこととは) 別な意義があるに違いない」

かくして経巻をたずさえて僧房に入り、ある比丘に請うて、概要を解説してもらつた。遂に因果の道理を深く悟り、三世のことを会得し、はじめて仏教が広大で、俗書とは比較にならないことを知つたのである。そこで世俗の榮華を捨て、出家して厳しい修行を行つた。大乘小乗の經典と諸の部派の律を讀誦し、常に利他伝教を先にし、自己の安穩のみを願うことはなかつた。

以魏嘉平中²⁰⁾。来至洛陽²¹⁾。于時魏境雖有佛法。而道風訛替。亦有衆僧。未稟歸戒²²⁾。正以剪落殊俗耳。設復齋懺事法祠祀。(補注)迦羅既至大行佛法。時有諸僧。共請迦羅。訳出戒律。迦羅以律部曲制文言繁広。佛法未昌。必不承用。乃訳出僧祇戒心²³⁾。止備朝夕。更請梵僧。立羯磨法²⁴⁾受戒。中夏戒律。始自于此。迦羅後不知

所終。

In the *Chia-p'ing* period of the Wei he came to Loyang. Although at that time in the Wei region there was the Buddhist Law, yet the religious practices there were erroneous and substituted [for the true ones]. Moreover, there was a group of monks who had not yet received the [threefold] refuges (*triśaraṇa*) and the precepts [in full] (*śīla*), but had merely taken scissors and cut off their hair to distinguish themselves from the laity.

After the arrival of Dharmakāla, people extensively practiced Buddhism. At the time there were several monks who jointly invited Dharmakāla to translate the precepts and discipline (*śīla-vinaya*). Dharmakāla felt that the *vinaya* works were complicated as to their rules, and extensive in their wording, and definitely would be of no use where Buddhism was not yet flourishing. Thus, he [only] translated the *Seng-ch'i chieh-hsin*. This merely provided for the morning and evening [services]. They again invited an Indian monk to institute the rules of the *Karma* [*vācā*]. The *śīla* and *vinaya* in China commence with these. We do not know where later on Dharmakāla died.

[訳]

迦羅は、魏の嘉平年間に洛陽にやって来た。当時、魏の国に仏教はあるにはあったが、内容は誤って伝えられていた。また多くの僧侶がいたが、まだ帰戒も受けておらず、剃髪している点のみが俗人と異なるありさまであった。また齋や懺悔を行うにしても、そのやり方は祠祀（中国古来の宗教儀礼）にのっとるものであった。迦羅が来てから、大いに仏教は行われるようになった。時に数人の僧侶がきて、ともに迦羅に戒律を訳出してくれるようお願いした。迦羅は、戒律の具体的な体系が、文字にすると膨大で、仏教がなお盛んでない状態で、これを翻訳してみても、きっと用いられることはあるまい考えた。そこで『僧祇戒心』を訳出して、ただ朝夕の用に備えることにした。さらにインド人の僧に依頼して羯磨の法を立てて受戒の儀式を行った。中国の戒律は、実にここに始まったのである。迦羅が、その後いつ亡くなったのかわからない。

時又有外国沙門康僧鎧²⁵⁾者。亦以嘉平之末。来至洛陽。訳出郁伽長者等四部經²⁶⁾。又有安息国沙門曇帝²⁷⁾。亦善律学²⁸⁾。以魏正元之中。来遊洛陽。出曇無徳羯磨。又有沙門帛延²⁹⁾。不知何人。亦才明有深解。以魏甘露中。訳出無量清浄平等覚經等凡六部經³⁰⁾。後不知所終焉。

[K'ang Seng-k'ai]

At the time there also was the foreign *śramaṇa* K'ang Seng-k'ai (a Sogdian, or his master was, K'ang is an *ethnikon*, Saṅghavarman). He likewise arrived in Loyang at the end of the *Chia-p'ing* period (249-254 A. D.). He translated the *Yu-chia chang-che* (*Ugra [datta] paripṛcchā*), and other scriptures, some four works.

[T'an-ti]

There also was T'an'ti, a *śramaṇa* of the country of Arsak. He likewise excelled in the study of the *vinaya*. In the *Cheng-yüan* period of the Wei (254-256 A. D.) he came in the course of his travels to Loyang, and translated the *Kama [vācā]* of the *Dharmagupta* [School].

[Po-yen]

Also there was *Śramaṇa* Po-yen, but we do not know from where he hailed. He likewise was talented and brilliant, and possessed a deep understanding [of Buddhism]. In the *Kan-lu* period (256-259 A. D.) of the Wei he translated the *Wu-liang ch'ing-ching p'ing-teng chiao ching*, and other scriptures, some six works. We do not know where later on he died.

[訳]

その当時、外国の沙門で康僧鎧というものがいた。この人も、嘉平年間の末に洛陽にやってきた。『郁迦長者経』などの四部の経典を訳出している。

また安息国の沙門、曇帝も、律学に精通していて、魏の正元年間に洛陽に来て、『曇無徳羯磨』を訳出している。

また沙門帛延もいたが、出自は明らかでない。才能があり深い理解力もあった。魏の甘露年間に、『無量清浄平等覚経』など、六部の経典を訳出している。いつ

亡くなったかはわからない。

【曇柯迦伝注】

- 1) 曇柯迦羅……法時という訳から、原名は Dharmakāla。実際、唐・法琳の『破邪論』(T52・480b)などでは、曇摩迦羅と表記されており、宇井伯寿博士は曇柯迦羅の「柯」を衍字であろうとしている(『支那仏教史』1938, 5頁)。三国時代、魏の治下に、『僧祇戒心』を訳し、中国の戒律は、ここに始まったとされる。伝記は、『歴代三宝紀』巻5(T49・56b), 『大唐内典録』巻2(T55・226c)などに存するが、『出三蔵記集』には、彼に関する記載が一切見られない。なお曇柯迦羅の事績については、以下の書に言及されている。

塚本善隆『中国仏教通史』第1巻(1979)137~139頁

鎌田茂雄『中国仏教史』第1巻(1982)175~183頁

横超慧日「広律伝来以前の中国に於ける戒律」(『中国仏教の研究』第1巻所収)11~28頁

- 2) 梵福……生天の福。
- 3) 才悟……才知があってもものわかりが早いこと。『南史』巻19「謝靈運伝」に「阿連才悟如此」〔阿連が才たけて聡いありさまは、このようであった〕とある。
- 4) 四囲陀論……囲陀論とはヴェーダ(Veda)の音写語で、古代インドのバラモン教(Brahmanism)の根本聖典のことである。ヴェーダは本来「知識」特に「宗教的知識」を原義とするところから、転じてその源泉となる聖典を意味するようになった。非常に大部で複雑な組織をもって構成されており、特に以下の4書が4ヴェーダとして名高い。すなわち、4ヴェーダとは、リグ・ヴェーダ(R̥g-Veda), サーマ・ヴェーダ(Sāma-Veda), ヤジュル・ヴェーダ(Yajur-Veda), アタルヴァ・ヴェーダ(Atharva-Veda)である。
- 5) 風雲……『易』乾卦に、「雲從竜。風從虎。聖人作而万物覩」〔雲は竜に感応し、風は虎に感応し、聖人が世に現れれば、万物はこれを仰ぎ見る〕とあり、風雲は、天地万物の感応を指す。曇柯迦羅は、こうした感応の条理に通じていて、ものの変化を予測し得たと言うのであろう。
- 6) 星宿……星の位置を表わすための天球上の区画のこと。または星座のこと。ここでは後者の意。『漢書』巻36「劉向伝」に「昼誦書伝、夜觀星宿」〔昼は書籍を読み、夜には星座の位置を観察した〕とある。
- 7) 凶讖……凶録ともよばれ、将来の吉凶をしるした予言書のこと。王者の運命、人事の未来を予言したものである。凶は、河凶で、中国古代の伝説で伏羲のとき、黄河から出た竜馬の背に現われていた凶をいい、易の卦のもととなったものとされる。讖は、符命で、天の神が天子を選ぶ際に現わす奇瑞の書を指す。

- 8) 運変……人の運勢吉凶。
- 9) 該線……かねあわせる, すべあわせること。『梁書』卷25「徐勉伝」に「応対如流, 手不停筆, 又該綜百氏, 皆為避諱」〔受け応えはあたかも流れるがごとくで, 手は筆を執って停滞することがなかった。また百家の学に兼ね通じていたので, 人々は, はばかって彼を避けた〕とある。
- 10) 天下文理……天文地理に同じ。すなわち天と地に起こるあらゆる現象を言う。『易』「繫辭上傳」に, 「仰以觀於天文, 俯以察於地理」〔仰いでは天文を観測し, うつむいては地理を考察する〕とある。
- 11) 法勝毘曇……法勝は, Dharmaśreṣṭhin のこと。説一切有部の論師として知られ, 『大毘婆沙論』を要約して『阿毘曇心論』4巻をつくった。この書は, 僧迦提婆訳が現存しており (T28, No. 1550), その構成は, (1)界品(2)行品(3)業品(4)使品(5)賢聖品(6)智品(7)定品(8)契經品(9)雜品(10)論品の10品よりなるが, 第1品より第8品までは, 陳の真諦の伝えた『阿毘曇經』の説相に相応するものであることが指摘されている。詳しくは, 呂澂「毘曇的文献源流」(『現代仏学』1961-1) 参照。
- 12) 浪志……「縦意」と同義で, 心をほしいままにすること。ここでは, 興味の赴くままにさまざまな古書を読みふけたという意味であろう。なお本書巻1僧伽跋澄伝に「浪志遊方」〔諸国遊歴に思いを馳せ〕の用例がある。
- 13) 墳典……三墳五典の略で三皇五帝の書をいうが, その教え方には異説がある。これらは早くに消失したが, その後, 一般的には古い書物・聖人賢人の述べた書物を意味するようになった。『文選』卷45「尚書序」に「伏羲神農黃帝之書, 謂之三墳, 言大道也」〔伏羲・神農・黃帝の書, これを三墳といい, 大道を意味する〕とある。
- 14) 遊刃……『莊子』「養生主篇」に, 「彼節者有間, 而刀刃者無厚, 以無厚入有間, 恢恢乎其於遊刃必有余地矣」〔骨節というものには隙間があり, 牛刀の刃先にはほとんど厚みがありません。その厚みのないものを隙間のあるところへ入れるのですから, ひろびろとして, 刃先を動かすにも必ずゆとりがございます〕とあり, 料理人の刃さばきの見事さを表す語であった。後に素晴らしい才能や智慧を, 鋭利な刃物にたとえて, 物事の処理や分析の巧みさを示す表現として用いられた。『肇論』「般若無知論」に, 「游刃万機」〔あらゆる政務を巧みにこなす〕(T45・153a) とあり, 元康の『肇論疏』巻中に, これを注して「游刃万機者, 智刃也」〔游刃万機とは, 智刃なり〕(T45・176c) とある。
- 15) 頓出情外……頓出は頓超に同じ。情は俗情を言い, 世俗的な考えや知識を指す。
- 16) 理致鉤深……鉤深は, 釣り針を深みに入れることで, 転じて, 思いを, 眼に見えない奥深いところへ進めていくことを指す。『易』「繫辭上傳」に, 「探賾索隱, 鉤深致遠, 以定天下之吉凶」〔隠された意味を探り求め, 深遠な道理に思いを致して, 天下の吉凶を定める〕とある。ここでは, 仏教の教理が, 眼に見えない奥深いものの道理を説いているという意味である。

- 17) 精要……精はもののもっとも純粹ですぐれた部分という意。要はかなめ、もっとも重要なところ。ここでいう精要は精髓と同じような意。『三国志』巻16「杜恕伝」注に「杜氏新書曰、恕弟理，字務仲，少而機察精要，畿奇之，故名之曰理」[『杜氏新書』にいう。杜恕の弟の杜理は，字を務仲といい，若年ながらものの精髓をすばやくとらえるので，杜畿は彼をみどころがあると思った。そのため彼に理と名付けたのである]とある。
- 18) 毘尼……梵語 vinaya の音訳。經・律・論の三蔵のうち律のこと。仏教出家教団の日常生活を規制する戒律，またはこれらを説いた聖典の総称をいう。
- 19) 常貴遊化。不樂專守……遊化は，広く諸國に遊行して，求法伝道することで，專守は，修行して自己一身の救いを求めること。本書巻1 撰摩騰伝注(4)を参照されたい。
- 20) 魏嘉平中……三国，魏の齊王（廢帝）の治世，249～254年。これについて唐・法琳の『破邪論』巻上には，「魏書云，文帝黃初壬寅之歲，有沙門曇摩迦羅，至許都訳出戒律」[『魏書』に，文帝の黃初3年（222）に，曇摩迦羅という沙門がおり，許都にやってくる戒律を訳出したと云う]（T52・480b）とあり，『開元積經錄』巻1にも，「文帝黃初三年壬寅。來至洛陽」[文帝の黃初年に，洛陽にやってきた]（T55・486c）と述べている。
- 21) 洛陽……当時の洛陽は後漢末の黃巾の乱，及びそれに続く軍閥の抗争，特に董卓（?—192）の乱により，潰滅的な打撃を被った。以来しばらく混乱した状態にあったが，魏の曹丕が後漢最後の皇帝，獻帝に迫って位を譲らせ，220年魏王朝を創始し，洛陽宮を営んでよりは，次第に安定する方向に向かった。西域との往来も盛んとなり，曇摩迦羅のほかにも，康僧鎧が嘉平年間に洛陽にきている。
- 22) 帰戒……三帰戒の略。五戒等の戒律を受けるに当たり，まず仏法僧の三宝に帰依する戒を師より受けなければならない。これを受戒の三帰といい，通常は，戒師の教えにしたがって，三たび三帰戒文を唱える。
- 23) 僧祇戒心……大衆部所伝の『僧祇律戒本』（佚書）のこと。『歴代三宝紀』に，「魏僧祇戒本一卷。初出見竺道魏世録」（T49・56b）とあり，竺道祖（348—419）の『魏世録』（佚書）にはじめて記録されたものらしい。
- 24) 更請梵僧。立羯磨法……羯磨は，受戒や懺悔を行う作法，規式の事。またこうした作法や規式を戒場で指示する僧を羯磨師という。曇柯迦羅は，この羯磨師をインド人の僧に依頼し，インドの正式の受戒作法を中国で行おうとしたわけである。
- 25) 康僧鎧……Saṃghavarman。ここでは，単に「外国沙門」とあるが，『歴代三宝紀』巻5（T49・56b）では，「天竺國沙門」という。
- 26) 訳出郁伽長者經等四部經……慧皎は，彼の訳出經典を4部としているが，『歴代三宝紀』などの經錄では，『郁長者所問經』2巻，『無量壽經』2巻の2部4巻を挙げている。浄土諸宗で依用されている『無量壽經』は，唐代以後，ずっと康僧鎧訳として広く流布してきたが，現代ではほとんどの学者によって否定されている（望月信亨『仏教經典成

立史論』1946, 220頁。藤田宏達『原始浄土思想の研究』1970, 62～64頁)。

また『大宝積経』(T11, No. 310) 卷82, 郁伽長者会第19に収録されているものが、康僧鎧の訳とされていたが、これも現在疑問視されている(平川彰『初期大乘仏教の研究』1968, 488～489頁)。

27) 曇帝……曇帝の訳経については、『歴代三宝紀』卷5に、竺道祖の『魏録』によるとして、『曇無徳羯磨』一卷を挙げている。正元一ないし二年(254または255)に、洛陽の白馬寺で訳出したという。しかし、その訳語の検討から、『曇無徳羯磨』(T22, No. 1433)の曇帝訳であることは否定されている(平川彰『律蔵の研究』1960, 202～218頁)。

28) 善律学……『歴代三宝紀』には、『四分律』に通じていたと述べている。

29) 帛延……『歴代三宝紀』卷5に、「西域沙門白延。懐道遊化。甘露年中。来届洛陽。止白馬寺」〔西域の沙門白延は、真理を抱いて伝教の旅をし、甘露年間(256～259年)に洛陽に到着し、白馬寺に住した〕(T49・56c)とある。

30) 訳出無量清浄平等覚経等凡六部経……『出三蔵記集』卷2には、『首楞嚴経』など3部の経を挙げているが、いずれも闕本とする。『歴代三宝紀』は、竺道祖の経録などによって6部8巻を挙げている。いずれにしても、これらの訳経には疑問とすべき点が多い。

(補注)……「設復齋懺事法祠祀」の一文に対するリンク英訳なし。